



# W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

## 第46号

## モーツァルトは永遠の友

モーツァルトへの手紙 (その22)



会員番号 K.618 加藤 明

ある晩秋の朝、眩しいほど鮮やかな紅葉の樹木を拝みながらゆっくりと車を走らせる。いつものルーティン、今朝のCDはこころにフィットするシューベルト。

物憂げで先の見えない彷徨の心模様を多様な形式でとことん歌い続けたシューベルト。そんな彼に惹かれる。励ましではなく、「なるほど」と頷かせ、やさしく美しい旋律とハーモニー、そして痛みを伴った音の強弱について共感してしまう。



ああモーツァルトよ、21世紀の現代人にとっては未曾有の2年にも及ぶパンデミックがいまだ終結を見せないまま今日に至っています。

コロナウイルスという視えない敵との果てしない苦闘が続いている中、小生にあっては「いまどうおのれに向き合うべきか？」という足元の問いかけ避けがたく、ただただ悶々とする日々なのです(冒頭のシューベルトの彷徨にも似て・・・)。

幸運にも今年は「仕事」という日常の営為に

は支障がなく、秋田市と五城目町の間を往復2時間かけてひたすら車を走らせ、あなたをはじめ古今の作曲家の名盤を聴いてはこころ躍らせ、時には背中を押されながら通勤しておりますが。

一方、勤務している「道の駅」にはここに来てコロナとは異なる課題が散見されるようになってきました。野菜・加工食品などを生産・出荷する主にベテラン女性たちの正に高齢化によるさまざまな問題が深刻化してきているのです。

高齢化で「足腰が弱って出荷頻度が鈍る」、「眼が悪くなるにつれ品質の劣化がみられる」、「味覚面での衰えからか漬物の味が一定しない」といった現象のほかに、より深刻なのは「〇〇を出荷していたあのばあさんがもう来られなくなった」という痛ましくも絶望的な現象が見られるようになってきたことです(皮肉な話ですが、筆者にもこうした老いの現象が当てはまるようになってきたことは否めませんが・・・)。

因みに、我が《モーツァルト広場》の運営を任とする月一の幹事会も、ここ数年は通常6名で意見交換してきたのですが、直近の2年ほどで出席者が3名も減少するという何とも寂しい状態で、こちらは単に高齢化にとどまらず、コロナという視えない敵による影響と言えなくもない（でも、モーツァルトよ、あなたへの思いの結束力は衰えておりません）。

ついでに言うと、このミーティングの会場も定番だった賑やかな居酒屋から、いつの間にか大声がはばかりれる明るく健康的な喫茶店にとって代わった次第。

喫茶店と言えば、クラシック喫茶全盛時代に悪友らと紫煙をくゆらせながらお喋りしたコーヒータイトムがほぼ半世紀を経てデジャ・ビュさながらの蘇り体験となり、時に不思議な懐かしさにひたる己を意識してしまうのですが・・・。

ところで、くだんのクラシック喫茶では当時、どちらかと言うとロマン派のBGMが主流だったようです。小生にとってそのころのモーツァルトは何か物足りない部類に属し、どちらかと言えば耳障りしない分、気にも留めない音楽だったと思われまふ。そんな小生が「生のモーツァルトを聴きたい」、というわがままを行使するために《モーツァルト広場》を結成したのは45歳。すでにクラシック喫茶全盛時代から四半世紀が経過していたわけですから、まったく遅咲きのモーツァルティアンに違いありません（モーツァルトよ、あなたに掛け替えのなさを「発見」したころ筆者はすでに40才、「不惑の年齢」になっていたから）。



当《モーツァルト広場》の会員（k.364）高橋喜美子さんが入会されたのは2016年の8月でした。入会のきっかけはその半年ほど前に入会された朝吹英和さん（k.504）のご紹介によるものでした。

朝吹さんはつい先ごろまで東京を拠点とする《日本モーツァルト愛好会》の代表をなさっていた方で、2016年のアトリオンで開かれた《モーツァルト広場》20周年記念コンサートにわざわざお越し下さり、小生はそこで初めて知遇を得たのでした（お会いしてすぐ朝吹氏のモーツァルトへの深い洞察とリスペクトには敬服しきりでした）。

偶然にも秋田市ご出身の高橋喜美子さんはご主人の高橋貞次さん（本職は建築家で、フルートの名手）共々《日本モーツァルト愛好会》の会員として朝吹さんとは浅からぬお付き合いをされていたようで、そうしたご縁で《モーツァルト広場》をご紹介いただいた、という経緯があります。

そして、3年前の《広場》のサマーコンサートにご夫婦で東京から参席いただき、その折に初めてお会いする機会をもちました。

しかし残念ながら、遠来のお二人にまともな接待もできず、わずか10分ほどの立ち話の後、再会を約してお別れしたのでした。

その時、初めてお会いしたご夫婦なのに、何故か以前から顔見知りの古い友人に会ったような不思議な感覚に襲われたことを記憶しています（後に喜美子さんから伺ったらお二人も同様の思いを懐かれたようでしたが）。

今年の6月5日、前触れもなく『永遠の友

永遠の友 モーツァルト



～絵画と建築～ 高橋貞次作品集

『モーツァルト』というタイトルが付けられた高橋貞次さんが描かれたモーツァルト作品集が拙宅に届けられました。

かねてより、プロ顔負けの精緻にして色彩豊かなモーツァルトの絵を描かれていたことは年賀ハガキなどで存じていましたが、観るからに興味をそそられる立派な装丁の画集を手にして、とんでもない本を出版されたことに度肝を抜かれてしまったのです。しかも、長い年月をかけて描きためられた様々な時代のモーツァルト像の見事な出来栄にすっかり感嘆してしまっていたものでした。

この作品集の見開きには「謹呈」のしおりに

謹呈

永遠の友 モーツァルト

～絵画と建築～ 高橋貞次作品集



貞次さんの朱印が押されており、裏表紙には非売品（確か250部の印刷とのこと）であることも記されておりました。

そして、「拙いものですが、全力を投じて作成したもので、眺めて楽しんで貰えましたら幸いです」という印刷された挨拶文の末尾には、貞次さんの直筆で『コロナの影響もあり、個展はやめ、本を出すことにしました』という出版理由が力強い筆致で丁寧に書かれておりました。

実はこの『永遠の友 モーツァルト』出版は当初から計画されていたものではなくやむを得ず出版せざるを得なかった、という裏の事情があったのです。

昨年の4月に都内の画廊を借りて個展を開く予定でしたが、コロナ禍による影響で開

**♪ 高橋貞次モーツァルト絵画展 ♪**  
**2020年4月5日（日）～4月12日（日）**  
 早稲田漫研OBが描く遊び心  
 満載の世界  
 心の友モーツァルトを描きました

ザルツブルク  
 ウィーン  
 ランパツハ

11:00～16:30  
 初日は13:00から  
 最終日は16:00

ギャラリー永谷2 (ながたに)  
 東京都武蔵野市吉祥寺  
 本町1-20-1  
 吉祥寺永谷シティプラザ  
 1階  
 ☎0422-21-9325

お気軽にお立ち寄りください (吉祥寺駅北口徒歩5分  
 ヨドバシカメラ隣)

催断念を余儀なくされた、というどうしようもない背景があった訳なのです。小生にも2月にご丁寧な個展のご案内状が届き、小生は興味津々万象繰り合わせても見学に伺うつもりでおりました。

しかし、個展の計画中にいよいよコロナが猛威を振るいだしたことで翌3月には開催断念のお知らせが届いたのでした。

貞次さんの積年の願望を根こそぎ奪い取ったコロナウィルス、ここにも身近なところで隠れた犠牲が払われるという惨い出来事があったことを知るべきでしょう。

そして、開催断念の直後、追い打ちをかけるようにご夫妻にとんでもない不幸が襲うのです。

あろうことか貞次さんが進行性のガンに侵されていることが判ったのです。

個展開催の希望・期待⇒開催の断念・苦渋⇒そして進行性のガンの罹患、というほんの数か月間の暗転であり、本人はもとより喜美子夫人の心情を察するにあまりある事態が起きてしまったのでした。

診察を受けた貞次さんは医師の余命宣告のあまりの短さに心底から打ちひしがれたに違いありません。

しかし、この余命宣告を受けて貞次さんは気丈にも発想の転換を図ることになるのです。

それは、『ようし、個展がダメなら本を出そう！』という起死回生の一手でした。

そしてそれは、貞次さん一世一代の悲願、正に命を懸けた出版の萌芽の瞬間でもありました。

またそれは、病魔と闘いながら死を見据えた

貞次さんのギリギリの自己実現のための揺るぎない選択を意味していたのです。

その凄まじいガンとの格闘を見事に乗り越えて出版された貞次さん渾身のモーツァルト画集『永遠の友 モーツァルト』。

これは、手にするたびに作者貞次さんのモーツァルトへの並々ならぬ想念が伝わる稀有なモーツァルト文献の誕生を世に知らせるものでした。



モーツァルト没後230年の節目、2021年6月14日に高橋貞次さんはとうとう昇天してしまいました。

天国のモーツァルトは貞次さんという熱烈な信奉者をきっと悪戯っぽく、あの冗談めかした眼差しで歓迎しているに違いありません。

なぜなら、後で気が付いたことですが、なんと貞次さんの命日6月14日は、31歳の悪戯好きのモーツァルトがウィーンの音楽仲間の集いのために創り、特異な光彩を放つディヴェルティメント、あの《音楽の冗談》(k.522) を作曲完成させたその日だったのですから。合掌

end

## 映画「アマデウス」の鑑賞と随想（下）

会員番号 K.203 松田至弘

(4)

先に、「アマデウス」の映画化に当たって、フォアマン、シェファー、ゼインツの三人が合意し目的とした事項について述べたが、それは達成されて、圧倒的な成功をおさめたと言っているのではないだろうか。

本来、舞台劇だった作品を、映画という手法によって時間的・空間的、そして大衆向けに拡大して、このように成功した事例はそんなに多くはないと思われる。

この映画はモーツァルト音楽のファンだけでなく、クラシック音楽に関心のなかった人々をも引きつけ、誰でも楽しめるエンターテインメント（娯楽作品）として抜群の人気を博した。

では、映画史における「アマデウス」の業績をどう捉えたらいいのであろうか。この点について、アメリカの著名な学者で社会学と映画史の研究家であるエマニュエル・レヴィの指摘があるので、引用することにした。

「<アマデウス>も、ある程度ミュージカルのジャンルに含まれるとはいえ、その最大の業績は、モーツァルトの音楽を映画のストーリーに統合させた点にある。」（濱口幸一訳『アカデミー賞全史』）

ご承知のように、モーツァルトの作品は、600曲を優に超え膨大である。そのなかから選び出した最も適切と思われる曲を、ドラマの展開過程の各シーンに一致・統合させるには、映

画撮影や編集上の特別な工夫と努力が求められたのである。

モーツァルトの曲のレコーディングは、音楽監督のネビル・マリナーが、生地ロンドンで自身が設立したアカデミー室内管弦楽団や同合唱団を指揮して行われた。映画はモーツァルトの素晴らしい曲であふれ、観客をとりこにし、また、そのオリジナル・サウンドトラック盤も圧倒的な支持を受けたのである。



「アマデウス」オリジナル・サウンドトラック盤CD

この映画は、オペラ場面や音楽が多いことから、「クラシック系音楽映画」として『ミュージカル映画事典』（平凡社、2016年）でも取り上げられている。

\*

ところで、「アマデウス」は、モーツァルトの生涯を時間を追って正確に辿った音楽伝記映画ではない。音楽家個人の人生と業績、その時代を厳密に復元したものではない。この映画で意図されたのは、シェファーが自ら述べているように、「事実に基づいたファンタジー」であ

る。

映画に登場したのは、子供のときには神童と騒がれるが、成長するに及び、既定の枠組み（範疇）のなかにはとてもおさまりきれない自由な人間モーツァルトだった。

ダンスが好き、女が好き、遊ぶことなら何でも好き。逆さ言葉を発したり猥雑な冗談を言ったり、すぐカッとなったりするかと思うと、時折甲高い声で笑う。ビリヤードをしたり酒を飲んだりしながら作曲もする。また、借金に追われる生活を送る。一方、友情に厚く人情には弱い、自分の音楽的才能には、絶対的な自信を持っており、プライドが高く他人に頭を下げるのを嫌う。

こんなモーツァルトを一言で表現するのは難しいが、「天衣無縫で軽佻浮薄な音楽的天才」とでも言ったらいいのであろうか。

フォアマンはモーツァルトを、天才である前に自由人と捉えていたと考えられるが、この映画における新しいモーツァルト像は、19世紀以来強調されてきたアポロ的な理想のモーツァルト像、都合の悪い点を隠したり削除したりして美化されてきたモーツァルト像を一気に突き崩すことになったのである。天才は同時に、人間的にも崇高なはずだし、また崇高でなければならないという考えが、映像という方法を通して崩されたのである。

すでにユダヤ系ドイツ語作家のヴォルフガング・ヒルデスハイマー（1916～91）は、『モーツァルトは誰だったのか』（1966年、邦訳1985年）、それを改稿・増補した著作『モーツァルト』（1977年、邦訳1979年）によって、従来の

研究とモーツァルト像を手厳しく批判し、「モーツァルトのあるがままの生の姿」を包み隠さず露わにしようとした。それは大きな衝撃を与え、賛否両論の激しい論争を引き起こすことになった。

シェファーとフォアマンは、ヒルデスハイマーのこれらの著作やモーツァルト自身と父の書いた数々の手紙、歴大な研究書などを片っ端から読み、十分消化して映画に生かしたと考えられる。フォアマンは、モーツァルトのキャラクターについては、シェファーとの間で意見の相違がなかったことを明らかにしている。

\*

「アマデウス」は、映画としての作品価値が高いとマスコミや各方面で絶賛されたとはいえ、批判がなかったかというところではなかった。批判の鋒先は主として、モーツァルトの描き方やモーツァルト像そのものへ向けられたのである。いろいろな批判や批評が存在するが、そのいくつかを取り上げてみよう。

アメリカの音楽学者でハイドンとモーツァルトの専門家として日本でもよく知られているロビンズ・ランドン（1926～2009）は、1985年1



ロビンズ・ランドンの映画評  
（『ザ・サンデー・タイムズ』1985年1月20日）

月20日の『ザ・サンデー・タイムズ』に、「モーツァルト—我々の時代のためのヒーロー」なる映画評を寄稿し、次のように述べた。

「ヒルデスハイマーが、最近作の『心理学的伝記、(筆者=増補版の著作『モーツァルト』を指している)で描き、ピーター・シェファーとハリウッドが助長した新しい幻のモーツァルト像が改められるには、百年もの年月を必要とするであろう。さらに言えば、ピーター・シェファーが初め「アマデウス」の舞台劇で描き、この度のそれに従った映画脚本のモーツァルト像は全く誤ったものである。」

لندنはさらに続けて、映画は全体的につじつまの合わない代物であり、また、音楽に関する細部もほとんど正しくない。すべての音楽を担当したネヴィル・マリナーには責任があり、恥じるべきだと非難した。

これに対して、音楽学者の海老沢敏氏は1985年3月1日号の『朝日ジャーナル』(特集・モーツァルトはパンク少年だったのか)で、このように憤慨し感情的に批判する London に「私は必ずしも賛同しない」とした上で、「かつて19世紀に伝記家オットー・ヤーンが同じようなかたちでエドゥアルト・メーリケの小説を非難し、批判したのと同じ陥穽に、このすぐれた音楽史家がはまり込んでしまったのを心から惜しむのだ」と述べた。そして、「映画『アマデウス』の方は<詩と真実>の詩にかかわる別の次元の出来事なのだ」と強調した。

だが確かに、「アマデウス」のストーリーについてはまぎれもなく詩(文学的創作・ファンタジー)であるが、戯曲や映画で示されたモーツァルトの人間性、モーツァルト像も詩かと問われれば、決してそうとは言えないところもあったのである。

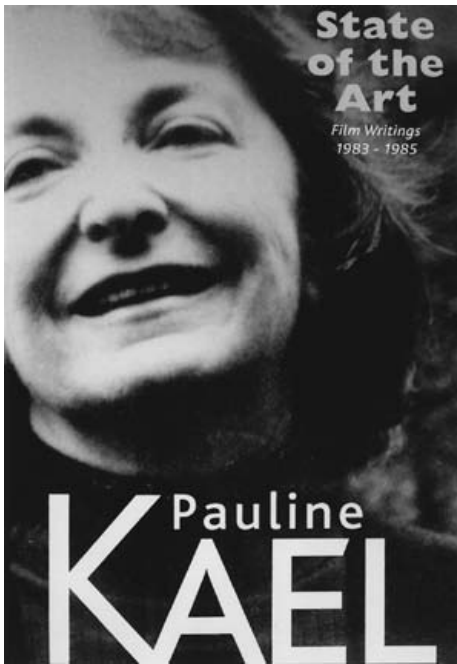
この点については音楽評論家で翻訳家の石井宏氏が、映画が製作される以前の1982年に、戯曲「アマデウス」のモーツァルトの人間性について、次のような見解を示していた。

「多くの人にとって、モーツァルトの人間性というものは、ほとんど無知の状態にあった。だから、戯曲<アマデウス>が London でスタートしてアメリカからヨーロッパ諸国でのヒットとなったときも、観客はそのモーツァルト像を、誇張されたものと受け取った人が多かったようであるし、モーツァルトの専門家といわれる人たちの中にも、完全には信じようとしないう人もいた。しかし、作者シェファーは、モーツァルトの全書簡を読んだと思われ、あそこに描かれているのは、ほとんど真実の像である。」

(『モーツァルト—音楽と旅の生涯』のあとがき)

石井宏氏は、前掲の『朝日ジャーナル』に「アマデウス」を観た感想を寄せているが、それによると映画は、舞台のような圧倒的迫力がなく、観終わった時点でほとんど感動が残らなかったとしている。映画は発想の転換から、「天才対凡人、のテーマを薄めてしまった甘い味つけ」になっており、「モーツァルトのパンクぶりもずいぶんと影をひそめて、かえって愛らしさがにじむ」ものになったと述べた。

では、映画の辛口評論で有名なポーリン・ケイルの場合は、どうだろうか。その短い映画評は、鋭い批判で満ちていた。



P・ケイルの『映画評論集1983～85』

たとえば、「この映画はモーツァルトを、ゴムのような顔のにたにたした好色な道化に描き、それが彼のすべてであるかのように見せることによって、サリエリの狂気じみた観念（筆者＝モーツァルトは努力も何もしなくていい。なぜなら彼の音楽は、神からの純粋な贈り物だからという観念）に裏づけを与えてしまう」と批判し、この「神からの口授という観念そのものが、モーツァルトに対する侮辱である」と述べた。

また、出来事やデテールが極めてあいまいとした上で、

「当時のウィーンでは、好色でスカトロジ的なジョークが社会で公認された会話の一部であったが、この映画では、下品な言葉をたのしんでいるのはモーツァルトだけに思える。それにこの映画は、モーツァルトの下がかったおふぎげや、うかれ騒ぎが、仕事からのてっとりばやい休息であることを明らかにしない。また、彼が皇帝に向かって、二重唱を三重唱に、三重

唱を四重唱にふやしていく、と得意げに説明するとき、それがうぬぼれた自己宣伝ではないことも明らかにしない。それは遊び心に満ちた構成を作る喜び、モーツァルトの音楽の核心にある喜びにほかならないのに」と指摘した。

\*

映画「アマデウス」のもたらした影響は、凄まじいものがあった。モーツァルト音楽の魅力が人々の心を捉え、人間モーツァルトのイメージは全世界的に、この映画を通して形成され定着したと言える。改めて、映像のもつ威力を実感せざるをえない。

映画は社会的には、「アマデウス現象」を巻き起こし、それはしばらく続くことになった。そして、やがて「モーツァルト・ブーム」が到来し、モーツァルト・ビジネス（商品化）に拍車が掛かり、2006年の生誕250年に至ってピークに達した。

一方でサリエリは、この映画によって一躍脚光を浴びることになったが、フォアマン＋シェファーによって描かれた物語が虚構であったにもかかわらず、その人物像やモーツァルトとの関係、毒殺疑惑などが、あたかも真実であるかのように多くの観客に受け取られてしまったのである。

研究の分野では、モーツァルトやサリエリの人と音楽を、より実態に近づけようとする新たな努力が試みられ、特に、サリエリの再評価なども行われたが、今日に至ってその成果が一般に浸透し知られたかということ、決してそうとは言えないのが現状である。



## 酒とモツの日々 (46)

会員番号 K.488 佐藤 滋

コロナ、オリンピック、政治不信、飲酒禁止に振り回された2021年がまもなく終わります。これほど多くの人が語り、批判し、弁解した年は無かったのではないのでしょうか。知恵と責任の無い人ほど声高に「語る」陰で、多数の分別ある人々が黙々と働いてこの国を前へ進めてきました。音楽家のような発表する場さえ奪われた人々の様々な怨嗟の声を背中で受け止めながら。

今年は曾野綾子氏の生誕90年でもあるので巣ごもりのなか、まとめて読む機会がありました。(あの斜に構えた独特の文体が心地よいのです) そのなかで心にとまった文章・・・人はある時「語る時」が終わった後で「黙する時」を見つける。人間は普通、俄に深い知恵を持つことは出来ない。人は長い年月、時には迷い、時には間違い、時には愚かなことに情熱を燃やし続けて、その果てに「黙する時」に出会う・・・(「長生きしたいわけではないけれど」2020)

これを読んだときMOZARTの「魔笛」を思い出しました。ザラストロが何故「沈黙」をタミーノ達に強制したのか。それは夜の女王ら「語る」人々への対抗ではないのか？ かつてベルリオーズが、夜の女王のアリアについて「最愛の娘を誘拐された母親の嘆きの歌が、あんな

ふうに歌われるなんて荒唐無稽であり、趣味の墮落である！」と批判しました。その後多くの批評も、この部分だけを捉えて賛否両論なのですが私はこの曲は「黙する」人との対比で、あえてコミカルかつ強烈なコロラトゥーラを設定したのではないかと感じています。語る人=悪、黙する人=善を際立たせる為に。楽譜に書く前に全ての音楽、構成が頭の中で完成していたMOZARTです。個別のアリアよりも全体の構成、対比、配置を把握してキャラクターを色濃く表現していたに違いありません。(ちなみに私はこのアリアを聴くと、某党の女性代議士を連想してしまいます。歌手が上手ければ上手いほど、身勝手に語る自己中の性格が浮き出てMOZARTの手腕に感心してしまうのです)

それでも私は時に「魔笛」を聴いてザラストロは本当に「善」なのか、わからなくなることがあります。彼は何を考えていたのか、彼にとって「沈黙」とは何か。MOZARTは彼に何を感じていたのか？ 夜の女王はあれほどキャラが立っているのに、ザラストロの真意が表現され尽くしていないもどかしさ。あれほど湯水のように音楽があふれ出していたMOZARTも、どこかで「黙する時」に出会い、その深層に戸惑うことがあったのかもしれません。

曾野綾子氏は人間の成熟過程として「黙する時」を捉えました。けれども巨悪ほど、音も無く忍び寄り、無言で世の中を支配してゆくものです。その兆候として現れるのが言論・表現の封殺。そして「沈黙」の強制。今年の大きな出来事のひとつに香港の民主系新聞が廃刊させられたニュースがありました。「魔笛」を権力収奪への寓話、と深読みするならば、ザラストロこそが全ての黒幕であることとなります。そのうち、習〇平そっくりのザラストロが舞台に登場するかもしれません。(そうなれば演出家も命がけですが)。音楽家をはじめとする表現者が、これからどんなメッセージを発信し、私た

ち鑑賞者がどう受け止め、吟味し、支援をしてゆくか。それは単に文化の発展だけでなく、社会の健全な安定にもつながってゆくのだと思います。

優れた芸術作品は誕生した当時の社会を反映するものですが、真に優れた作品は時代を超えて再臨し、新たな意味を吸収してゆくものです。時には作者の思案すら超えて。「フィガロの結婚」では権力者を痛烈に批判したMOZARTも「魔笛」の終幕では、素朴にザラストロ万歳の歓喜の歌声を響かせています。シカネーダー(台本作者)もMOZARTも、そこに21世紀の闇が潜んでいたことを知らずに。

## 事務局より

コロナ禍も少し落ち着き徐々に以前に賑わいが戻ってきているような昨今ですが、新しい生活様式に段々と変化していくことでしょう。音楽の世界でもようやく生で音楽を聴けるようになってきました。まだまだ制限はありますが喜ばしいことです。ただ今までと違う環境もできてます。例えば遠方の演奏会

をライブでオンラインで聞くことができる。旅費をかけなくても東京のコンサートが聴ける、これは素晴らしいことではないですか？ライブのよさとは違いますが、新たな楽しみを見つけながらこれからも音楽を楽しんでいきたいと感じている今日この頃です。(K575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R3年12月現在90名) [モーツァルト広場](#) [検索](#)  
入会金：¥2,000 年会費：¥3,000(諸会費、別途) ご紹介下されば幸いです。  
お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058  
又は 本田(事務局) 080(1673)8322